

2013年10月

第171回東京医科大学医学会総会

— 431 —

**P2-31.**

## 糖尿病性認知症の提唱

(社会人大学院2年老年病学)

○深澤 雷太

(老年病学)

櫻井 博文、馬原孝 彦、小山 俊一

金高 秀和、清水聰一郎、赤井 知高

高田 祐輔、大沼 剛志、久米 一誠

羽生 春夫

【目的】 糖尿病を伴う認知症の臨床病理像は多様であるが、脳血管障害 (CVD) に乏しく、アルツハイマー病 (AD) としての特徴的な臨床像を示さない一群が観察されることがある。我々は、この一群の病像を明らかにし AD との相違を比較検討した。

【方法】 2型糖尿病を合併し臨床的に AD と診断された175例を、SPECTによる頭頂側頭葉や後部帯状回の血流低下 (ADパターン) の有無とMRIによるCVDの有無から、AD群 (ADパターン+/CVD-)、AD with CVD群 (ADパターン+/CVD+)、Unknown origin群 (ADパターン-/CVD-)、Vascular origin群 (ADパターン-/CVD+) の4群に分け、臨床像を比較検討した。

【結果】 Unknown origin群は全体の32%を占め、AD群と比較して1) 高齢、2) HbA1cが高い、3) 糖尿病の罹病期間が長い、4) インスリン治療例が多い、5) 海馬の萎縮が軽度、6) ApoE4保有者が少ない、7) 注意力の障害が目立つが遅延再生の障害が軽度、8) 認知症の進行が緩やか、9) 炎症性サイトカインが高い、という特徴がみられた。さらに脳血流SPECTを縦断的に観察すると、初診時にはADパターンがみられなくても、数年後にはADパターンを示すものがUnknown origin群の約1/3にみられたが、残り2/3は依然としてADパターンを示すことはなかった。このうち、PiB-PET (アミロイド画像) を施行した一群の患者ではアミロイドの集積が陰性のものもみられた。

【結論】 糖尿病との関連が深く、ADや血管性認知症とは異なる臨床像を有する一群に対して、「糖尿病性認知症」という新たな臨床単位を提唱し、ADとは異なる治療法が考慮されるべきだと考える。

**P2-32.**

## 血清分子量別アディポネクチン濃度と子宮体癌の関連

(船橋市立医療センター産婦人科)

○大淵 紫、鈴木 康伸

(産科婦人科学)

井坂 恵一

【背景】 今回我々は子宮体癌と健常者を対象にアディポサイトカインとして知られているアディポネクチンを分子量別に測定し、子宮体癌の発症リスクとの関連を検討した。

【方法】 対象は、子宮体癌43例、健常コントロール群62例とした。同意を得て採取した血清中のアディポネクチン量をサンドイッチ酵素免疫測定法にて、Total、High molecular weight (以下HMW)、Middle molecular weight (以下MMW)、Low molecular weight (以下LMW) にそれぞれ分画測定し、それらと子宮体癌の発症リスクについて比較検討した。

【成績】 血清中のMMW-adiponectin量は、子宮体癌0.85 µg/ml (range: 0.37-5.40 µg/ml) が対象群1.40 µg/ml (range: 0.52-4.50 µg/ml) に比較して有意に低下 ( $P<0.01$ ) していた。また、年齢、BMI、高血圧、糖尿病を調整し多変量解析を用いて比較検討した結果は、MMW-adiponectin量の低下のみが子宮体癌の発症リスクに最も強く関連 (adjusted odds ratio: 4.89, 95%CI value: 1.25-19.11,  $P=0.022$ ) していた。

【結論】 今回、アディポネクチンを分子量別に検討した結果、MMW-adiponectin量の低下は、子宮体癌の発症リスクの独立した危険因子であり、アディポネクチンの効果は子宮体癌の発症リスクを低下させる可能性があることが示唆された。